

明治大正期の小学校教科書における挿絵の考察

～歴史・修身・国語教科書に描かれた英雄像（その1）

香曾我部 秀 幸

はじめに

我が国では、国民全員が6歳から15歳の9年間、義務教育を受ける。この時期に、児童生徒が最も密接に関わりを持つ書物は教科書をおいて他にないだろう。現代の小中学校の教科書は、表現力に定評のある画家を動員して、色彩溢れる挿絵が美しいカラー印刷で掲載されている。その目的は、まず児童生徒の興味関心をひき、文章の読みをたすけ、教科内容を一段と深く理解するためにあることは間違いないが、時に内容の理解は難くとも、挿絵の印象のみが、深く記憶に残る場合もあることは否定できない。幼年期から少年期、そして思春期へと、心身が急速に成長する時期に、最も身近に接する絵画の一ジャンルとして、教科書の挿絵は、人間形成にきわめて重要な影響力を持っていると言える。

このような教科書における挿絵は、我が国では何時ごろから始められたのか。実は江戸時代後期に寺子屋などで使われていた教科書、いわゆる「往来物」にすでに挿絵が描かれたものが少なからずあった。それらに描かれた題材は庶民の生活全般に亘っており、江戸期を通じて親しまれてきた草双紙の伝統に沿うものであった。そして明治維新後、近代教育制度が整備されていく過程で、夥しい数の教科書が刊行されてゆくが、中でも小学校用の歴史・国語・修身などの教科書には、木版単色(墨)摺りではあったが、古今の偉人像や昔話の情景、日常の生活風景など数多くの多様な挿絵が描かれた。

「書物の挿画は、読者に深い印象を与えるもので、文章よりも永く頭に残ることがある。…(中略)…即ち先づ挿画は、児童の興味を喚起して、

情操教育に資するところが多い。次に挿画によって、児童の知識を的確にする上、時には本文に記述せぬ事実をも、挿画によって、諒解せしめることが出来る。尚ほ、挿画を直観させ、又説明をかへることによって、幾多の教訓を児童に与へて、徳性を涵養する効が頗る大きいのである。」¹⁾

これは第二・第三期国定歴史教科書等の編集に携わった藤岡継平(文部省図書監修官)の言であるが、当時の教科書編集者の挿絵に対する認識を物語っていると言えよう。しかし、学校現場では果たして教科書の挿絵はどのように扱われ、どのような役割を担っていたのだろうか。

この時期の挿絵は、例えば歴史教科書において、一つの主題あるいは一人の人物に絞ってその図様を熟視していくと、その表現の変遷に明確な傾向があることに気付かされ、挿絵に託された意味が浮かび上がってくる。さらにその同じ人物・事象が、国語や修身教科書にも登場し、しかもその表現に異なった様相が見出せる場合もある。

今般、近代日本の教育史研究は大いに進展し、第二次大戦前の教科書についても、多くの研究者によって綿密な分析がなされているが、挿絵に関して言えば、いまだ研究は充分には尽くされていない。²⁾ とくに歴史あるいは修身の教科書の挿絵について詳しく言及した例を筆者は寡聞にして知らない。

そこで本論では、明治から大正年間に刊行された、検定教科書ならびに国定教科書の挿絵のうち、歴史・国語・修身の三科に共通して描かれた英雄像に焦点を当て、その表現の特質について、考察を試みるものである。

1 明治の教育制度の推移と教科書の変遷

明治初頭から三十年代まで、明治政府による教育制度の整備に伴って、初等教育に用いられる教科書は、大きな変化を余儀なくされた。まず、その制度の推移と教科書の変遷を概観しておこう。³⁾

1-1 学制発布と黎明期の教科書

わが国の近代の学校教育制度は、明治5(1872)年8月の「学制」⁴⁾の公布に始まった。「学制」は学校制度や教員養成に関する基本的な規定を明治政府が定めたもので、国民すべてが初等教育を受けることを義務づけ、それまで各藩の藩校、私塾、寺子屋などでそれぞれに行われていた教育が廃され、欧米を参考にした学科課程に則った学校教育が行われることとなった。公布から数年間に全国で二万校以上の小学校が整備され、明治12年頃には約40%の就学率を達成したとされている。⁵⁾

さらに文部省は、同年9月「小学教則」を公布して、小学校における具体的な教育課程を定めた。公の教科書の編纂がまだ未整備であったため、民間の刊行書物を、各教科の標準教科書として暫定的に選定した。この措置は、寺子屋等で使われていた旧来の往来物等を排除し、福沢諭吉ら文明開化に指導的な役割を果たした啓蒙家の著書を採択するなど、欧米の近代思想に基づいた教育を目指すものであった。とくに修身、地理、理学、博物学などは、欧米の教科書を翻訳編集したものが多く選定されている。そのリストを見ると、一般成人向けの、明治を代表するベストセラーが何種も含まれていることに驚かされる。主なものを以下に挙げよう。

綴字：『絵入智慧の環』(古川正雄著、明治3年)、『ちゑのいとぐち』(古川正雄著、明治4年)、修身：『童蒙をしへ草』(福沢諭吉訳、明治5年)、『泰西勸善訓蒙』(箕作麟祥訳、明治4年)、読本：『啓蒙智慧の環』(瓜生寅訳、明治5年)、『学問ノススメ』(福沢諭吉著、明治5～9年)、『天変地異』(小幡篤次郎著、明治元年)、地学：『世界国

尽』(福沢諭吉著、明治2年)、理学輪講：『窮理図解』(福沢諭吉著、明治元年)、読本輪講：『西洋事情』(福沢諭吉著、初篇慶応2年)、地学輪講：『輿地誌略』(内田正雄纂輯、川上冬崖模画、明治3～7年刊)

1-2 師範学校編纂と自由発行自由採択の時代

明治政府は学制発布と同時に、学制に定められた初等教育を推進するため、官立師範学校を明治5(1872)年に東京、以降大阪・京都・宮城・愛知・広島などに設立し、小学校教師の養成と新しい教育方法の伝習にあたらせた。

当初、小学教則に標準教科書として示された翻訳書や啓蒙書は、小学生にとって内容が高度に過ぎ、児童の実情に応じた学年別の教科書の早急な編纂が望まれた。そのため文部省は、民間の教科書を統制することなく、自由発行・自由採択制をとると共に、6年以降、師範学校と協力提携して、欧米の教科書を模範とした教科別の系統的な教科書を編纂、各府県にその教科書の翻刻を許可し、普及を促進した。ここに近代教科書の基礎が築かれたと言える。文部省・師範学校が関わった主要な教科書を挙げる。

『小学入門』(明治7年)、『小学読本』(田中義廉編、明治6年)、『地理初歩』(師範学校編、明治6年)、『日本地誌略』(明治7年)、『万国地誌略』(明治7年)、『史略』(1「皇国」・2「支那」・3-4「西洋」、木村正辞・内田正雄編集、明治5年)、『日本略史』(木村正辞編、明治8年)、『万国史略』(内田正雄編、明治7年)、『小学算術書』(明治6年)

1-3 開申制・認可制の時代

政府は明治12(1879)年9月「学制」を廃止して「教育令」を公布した。それまでの欧化主義的な方針が改められ、文部省の教育政策に大きな変化があらわれたが、その発端をなすものは同年の「教学聖旨」⁶⁾である。その内容については後章で詳述するが、これ以降、政府の教育政策はこの「聖旨＝天皇の意思」の基本理念に基づいて進められ、13年の教育令改正では、仁義忠孝を中心に据えた道徳教育が復活し、「修身」が筆頭教科に

定められた。また地方学務局内に「教則掛」や「教科書取調掛」が設置され、不適当な教科書の使用を禁止する措置がとられるようになった。続く14年5月、「小学校教則綱領」が制定され、これまで各小学校で自由採択されていた教科書を開申（届出）する指示が出されている。

さらに、16年には、この届出制が認可制に改められた。文明開化や欧米重視の風潮への批判、自由民権運動の抑圧等と関わって、教科書は儒教的傾向が強まり、復古主義的色彩の濃い内容となっていく。また、発行の自由についても制約が加えられ、小学校教則綱領に示された学級別教授要旨に基づいて編集するよう定められた。この時期に刊行された代表的教科書を挙げておこう。

『小学修身訓』（西村茂樹著、明治13年）、『幼学綱要』（元田永孚著、明治15年宮内省刊）、

『小学読本』（若林虎三郎編、明治17年）

1-4 検定教科書から国定教科書へ

明治19（1886）年「小学校令」が制定され、「小学校ノ学科及其程度」に準拠して、文部省による教科書の検定制が導入された。この制度は国定教科書制度が開始されるまで継続された。就学人口が増加し、様々な教育改革が進められたため、教科書の形態や内容に関しても、様々な模索が行われた。この検定期に刊行された小学校用教科書は、2315種類にもものぼっている。⁷⁾

22年「大日本帝国憲法」が公布され、天皇中心の国家統治の大綱が示されると、翌23年には国民教育の基本理念を明示した「教育勅語」が公布された。以降、第二次世界大戦終結まで、この勅語がすべての規範となり、尊王愛国を中核理念とした儒教的道徳を基礎におく教育体制が続くこととなる。同年、「小学校令（第二次）」が新たに制定され、翌24年の「小学校教則大綱」により、各教科の教授内容が詳細に規定された。

そして36年、小学校令が再び改正され、第24条に「小学校ノ教科用圖書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルベシ」⁸⁾と定められて、翌37年から教科書の国定制度が始められたのである。当初修身・日本歴史・地理・国語読本の4科目が国定

教科書と定められた。

2 検定期教科書の挿絵の概観

明治10年代から30年代にかけて刊行された、歴史、国語、修身の検定教科書に描かれた挿絵を概観し、その特色を考察する。

第一に、特定の人物・事象について、同一の逸話が採用されることが多く、時にはそれがほとんど同じ構図で描かれていることが注目される。例えば日本武尊の熊襲征伐、神功皇后の三韓征伐、仁徳天皇民のかまどの煙を望む図、和氣清麻呂の宇佐八幡神託の奏上、菅原道真恩賜の御衣を拜す事、平重盛の父清盛への諫言、川中島の上杉謙信・武田信玄の一騎打ちの場面など、歴史上の人物の事蹟が一つの話題に集約され、類似の構図で描かれる例が目立つ。これらの題材は、江戸から明治まで、浄瑠璃・歌舞伎あるいは講釈などで演じられたり語り継がれてきた物語・伝説によるものが多数を占めている。

第二に、第二次大戦後の小学校教育では触れられなくなった人物・事象に、焦点があてられていることが少なくない。例えば、神武天皇、神功皇后、八幡太郎、平重盛、児島高德、新田義貞、楠正行、木村重成などの人物は、現代の教科書で扱われる例はほとんど見られない。

第三に、画家名の明記あるいは署名が見られるものはほとんどない。僅かに松本楓湖⁹⁾、飛田周山¹⁰⁾らの日本画家や風俗画家等の数人の名が画面の落款から見出せるのみである¹¹⁾。この時期の出版物等における主力挿絵画家が教科書出版に携わっていたことは容易に推測できるが、教科書挿絵の絵画表現は、おしなべて典型的で独創性は感じられない。劇的な描写があるべき場面であっても、人物の動きは乏しく、彼らを取り巻く風景も芝居の書割に近く、奥深い空間表現はあまり見当たらない。人物の顔貌表現も、それぞれの性格を描き分ける個性の表出に至っているものは少ない。技術的な巧みさが感じられるものは見出せるが、独創的な表現力あるいは積極的な表現意識が不足

しているのは明らかで、現代の私たちが視覚的に満足を得るものとは言い難いところがある。

第四に、挿絵の原版の製版技法は、明治20年代までは伝統的な木版が大半を占めていた。口絵に多色摺りの例も多少あるが、本文は単色墨摺りのものが大半で、用紙は和紙が用いられ、袋綴じに製本されている。20年代に入ると木口木版が用いられ始め、中でも洋画家の山本芳翠¹²⁾が原画を描き、合田清¹³⁾が製版した「生巧館」製の挿絵は、西洋画的な明暗表現を刻線の密度で表わした、きわめて精細な表現が示されている。木口木版には繊細な絵柄の印刷を要するため、紙の表面が和紙よりも平滑な洋紙が使われた。

明治後期になると、短時間に比較的容易に製版可能な、垂鉛凸版および網目写真製版が実用化され、手間とコストのかさむ木口木版は急速に廃れていく。主に洋紙が用いられ、製本も洋綴じが主流となった¹⁴⁾。

3 国定教科書の挿絵の表現の検討

明治37(1904)年4月、40年間に及ぶ長い教科書国定制度が始められた。全国すべての児童が各教科において同一の文章を読み、同一の挿絵を目にすることになったのである。その影響力には計り知れないものがある。ここで、歴史、国語、修身の国定教科書に掲載された中から、何人かの人物に焦点をあて、その事蹟を扱った挿絵に絞って、それぞれの図様の変遷を検討することとする。

3-1 神武天皇—イメージの創出と定着

明治初頭、文部省が初めて刊行した歴史教科書『史略』(木村正辞編、明治5)は、神武から明治までの天皇の歴代史の体裁をとっていたが、神武天皇の挿絵は描かれていない。ところが、明治末から大正期の国定教科書(第一期～第三期)に描かれた神武天皇図は、以下の8図を数えることが出来る。この40年の間に、小学校教科書において、神武天皇のイメージはどのように創り出され、人々の間に定着されていったのだろうか。

歴史二期『尋常小学日本歴史 卷一 児童用』

(明治42)「第二 神武天皇」 (図1)

歴史二期『尋常小学日本歴史 卷一 児童用[改訂版]』

(明治44)「第二 神武天皇」 (図2)

歴史三期『尋常小学国史 上巻』

(大正9)「第二 神武天皇」 (図3)

国語二期『尋常小学読本 卷五』

(明治43)「第三 神武天皇」 (図4)

国語三期『尋常小学国語読本 卷五』

(大正12)「五 金鷄勳章」 (図5)

修身一期『尋常小学修身書 第四学年 児童用』

(明治36)「第二 大日本帝国」 (図6)

修身二期『尋常小学修身書 卷五 児童用』

(明治43)「第一課 大日本帝国」(図7)

修身三期『尋常小学修身書 卷五 児童用』

(大正10)「第一課 我が国」 (図8)

第一期『小学日本歴史一』では「神武天皇」の項にまだ挿絵は見られない。その図像は第二期(図1)より登場する。「神武天皇けはしき山道を進み給ふ」と見出しがあり、草深い山道に弓を携えて立つ髭面の神武天皇が描かれる。数人の家来が従っている。顔は左方へ向け右手をかざす、その視線の先に一羽のカラスが飛び去っていく。周囲の山間の風景が克明に描写されている。図2は、図1と同じ見出し、同じ情景だが、人物像の向きと動きに少々変化が加えられ、天皇は肅然とカラスの行方を見つめる。背景およびカラスの描写は模写したかのように似通っている。図3もまた同様だが、見出しは「神武天皇けはしき山道をわけ進みたまふ」と改め、右手後方の山の描写が整理されている。なお昭和9(1934)年発行の第四期『尋常小学国史』上巻でも図3と全く同じ画面が使われている。すなわち歴史教科書では、明治末期以降30年もの長期間、同一のイメージが続けられたのである。

この三図は「神武軍が熊野の峻険な山路で立ち往生した時、天皇の瑞夢によって八咫鳥が現れ誘導した。日臣命(道臣命)がこれに従って道を開いた」とする『日本書紀』卷三「神武東征」の



図1 尋常小学日本歴史巻一 明治42年



図2 尋常小学日本歴史巻一[改訂版] 明治44年



図3 尋常小学国史上巻 大正9年

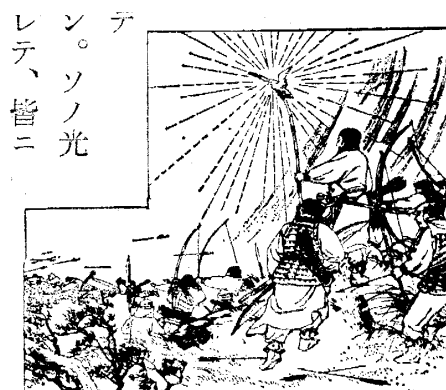


図4 尋常小学読本 卷五第三 明治43年

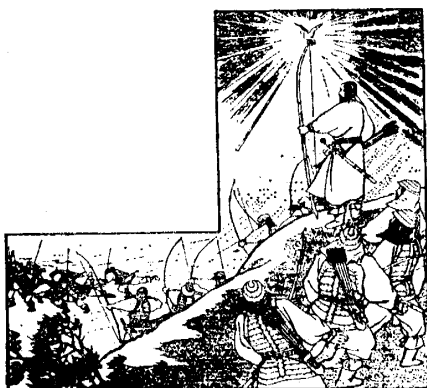


図5 尋常小学国語読本 卷五 五 金鷄勲章 大正12年

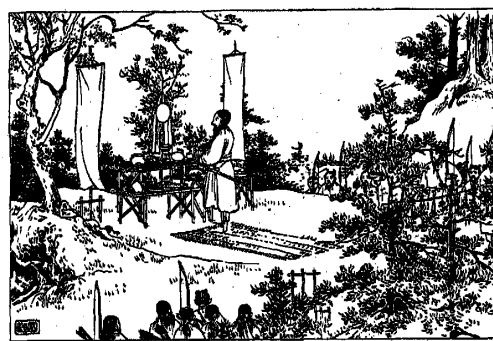


図6 尋常小学修身書4年第二 大日本帝国 明治36年

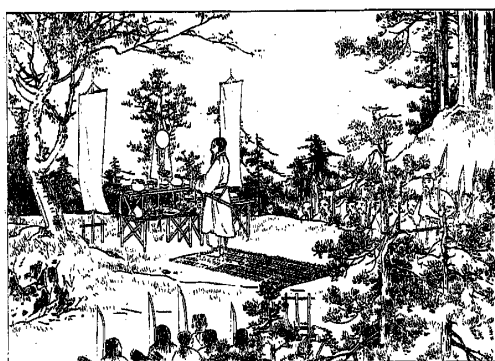


図7 尋常小学修身書巻五第一課 大日本帝国 明治43年

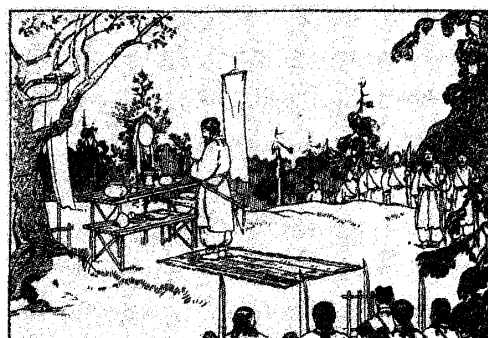


図8 尋常小学修身書巻五第一課 我が国 大正7年

「八咫鳥」の伝承¹⁵⁾に基づく場面である。検定教科書で盛んに描かれ、同時期の児童向け絵本にも同様の図(荒井周朋画, 参考図1)が少なからず見出せる。ただ, 教科書には道臣命の姿は見えない。なお図3は飛田周山の筆になる¹⁶⁾。

この神武天皇の服装と顔貌の表現であるが, 髪をミズラに結び, 袖口や裾の部分を結んだ筒状の上衣と袴を身につけ, 手纏・足纏を飾る姿は, いつの頃から定型化されたのだろうか。教科書に登場する神武像は, 明治8(1875)年刊の『日本略史』上巻「神武天皇東征ノ図」(図9)が, 筆者の知る最も早い例で, ここでは投降して平伏する敵兵を岩に腰掛けて見下ろす神武天皇が描かれるが, その顔貌と衣装には, まだ特定の表現は認められない。明治20(1887)年刊行の『小学校用歴史』第一にも「神武天皇の東征」図(図10)が掲載されるが, ここでは皇軍を先導する道臣命に焦点が当てられており, 後方馬上の神武天皇の姿形は敢えて不明確に表わされている。

実は神武天皇の図像は, 江戸末期までの日本画

の伝統には全く存在しなかった。江戸期の人々にとって神武天皇は未知の存在であったと言ってもよい。それが幕末の尊王思想の流布によって民衆の知るところとなり, それ以降の画家によって人物像が創案されることとなったのである¹⁷⁾。筆者の知る限りでは安政期刊行の『日本国開闢由来記』¹⁸⁾の歌川国芳(1797-1861)筆の口絵に描かれた神武天皇の姿(参考図2)が, 最も早い例である。しかしここに描かれた装束および風貌は時代考証に全く根拠が無く, 国芳の独創が多分に働いていると考えられる¹⁹⁾。さらに明治期の歴史画の規範とされる『前賢故実』²⁰⁾でさえも, 神武天皇の図像は無く, 八咫鳥の故事に登場する道臣命の図のみが描かれ, まだ後の定型像に直結する姿は連想できない。

この神武の装束と顔貌の表現は, 明治23(1890)年, 竹内久一(1857-1916)作の神武天皇像(参考図3)が決定的であったとされている²¹⁾。この木彫像は, 新聞『日本』が, 皇紀二千五百五十年の紀元節を祝して日本歴史上の人物の絵画彫



参考図1 家庭教育日本歴史 明治42年



参考図2 日本開闢由来記 口絵 神武天皇・五十鈴媛命



図9 日本略史 上巻 神武天皇東征ノ図 明治8年



図10 小学校用歴史第一 神武天皇の東征 明治20年

刻を懸賞募集した時の二等当選作品で、同年の内国勸業博覧会に展示された²²⁾。剣を左腰に提げ、右手を腰にあて、弓を持った左手を下に降ろし(現在、弓は取り外されている)、日本地図を踏み据えて前方を見やるポーズは、特定の故事に基づくものではなく、まさに天皇の「勇武」と「仁徳」を象徴する表現であった。久一は、綿密な考証をもとにこの装束を採用し、顔は明治天皇の写真を参考にしたと語っている²³⁾。この木彫像が神武天皇の基準像となり、明治34(1901)年の『修正小

学内国小史』甲種巻一(図11)のように、その模写図をそのまま掲載した教科書まで出版されている²⁴⁾。また、明治25(1892)年の『帝国小史』巻之一第二「神武天皇」挿絵(図12)や、明治33(1900)年の『新編修身教典 尋常小学校用』巻二第四課(図13)に見られるように、これ以降神武天皇の図像は、この装束を踏襲し、顔は例外なく明治天皇の面貌に似せたものになっていった。それは逆に、新体制の権威の象徴を担う目的をもって、神格化されつつあった明治天皇を神代の神武



参考図3 竹内久一作 神武天皇像 明治23年(東京藝術大学蔵)



図11 修正小学内国小史 甲種 巻一 明治34年



図12 帝国小史 巻之一 明治25年



図13 新編修身教典 尋常小学校用 巻二第四課 明治33年



参考図4 日本開闢由來記 巻3 金鷄 歌川 国芳筆



図14 新撰帝国史談 前編巻一 明治31年

天皇に重ね合わせるために、意図的に生み出された表現であったと言えるのである。

次に国語教科書に描かれた図4、5に注目しよう。図4は、左方に向けた髭面の人物が神武天皇である。左手に掲げた弓の先端に一羽の鳥（金鷄）が翼を広げてとまり、四方に光を放射している。供の者たちは弓を射かけ、左後方の賊軍が逃げ惑っている。図5も標題は「金鷄勲章」であるが、図様は極めて似ている。戦前の学校教育において、神武天皇は極めて特別な存在であり、そのイメージは、このように金色の鷲がとまった弓を掲げる勇武の姿に収斂されるだろう。この時期の絵本・児童書に登場する神武天皇の定型像で、『日本書紀』卷三「神武東征」の伝承を描いたものである。

「十有二月癸巳朔丙申，皇師遂撃長髓彦。連戦不能取勝。時忽然天陰而雨水。乃有金色靈鷲，飛来止于皇弓之弭。其鷲光晔煜，状如流電。由是長髓彦軍卒，皆迷眩不復力戦。」²⁵⁾

すなわち「長髓彦との連戦が劣勢になった時、突然金色の鷲（とび）が飛来して天皇の弓の弭に

止まり、稲妻のように輝いたため、敵軍の兵は皆、目が眩んで二度と戦うことが出来なくなった」という神武東征伝の一節である。

この図様もまた『日本国開闢由来記』に最も早い例が見出せる（参考図4）。画面左頁中央に神武天皇が立ち、弓を左手で掲げる。その弓の末筈に金鷄がとまり四方に強烈な光を放射している。背後の味方の軍兵は光を仰ぎ見、右方の敵兵は恐怖に逃げ惑う。武者絵の名手国芳の迫真的描写である。この図は木版墨摺りの板本の挿絵に過ぎないため、当時どれほど流布したのか不明だが、国芳の系列の浮世絵師に伝わったことは確かだろう。

この場面の図像が大衆化されるようになったのは、国芳の弟子大蘇芳年（1839-1892）の筆になる明治13（1880）年出版の「大日本名将鑑 神武天皇」（参考図5）²⁶⁾ からと考えられる。国芳の画面設定を踏襲しながら、鮮烈な色彩を用い、人物の大胆な動きや燦然と輝く金鷄の光線を強調して、神秘性をより高めている。日本の統治者としての天皇の聖性を極めて強く象徴する表現である。



参考図5 芳年筆 大日本名将鑑 神武天皇 明治12年



参考図6 大日本名将鑑 芳年筆 明治16年

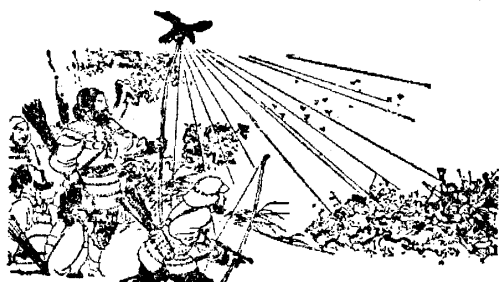


図15 国語読本尋常小学校用 卷七第一課 神武天皇 明治33年



図16 新編修身教典 尋常小学校用 卷二第三課 明治33年

既にこの時期、神武天皇即位の日が国の紀元と定められていた²⁷⁾。この燦然と光を発する金色の鶏の図は、まさにこの国を造った英雄のシンボルとして、大いなる人気を得たと思われる。この芳年の『大日本名将鑑』の揃物は、小型の銅版絵本(参考図6)に縮刷され、明治20年代にかけて何度も再版されている²⁸⁾。そのためきわめて多数の人たちがこの神武天皇の姿を目にする機会があり、これ以降、20年代から30年代にかけて多くの書籍および教科書の挿絵に描かれ、このイメージが定着するに至ったと考えられる。明治31(1898)年の『新撰帝国史談』前編巻一「神武天皇長髓彦を討ち給ふ」(図14)、明治33(1900)年の『国語読本 尋常小学校用』巻七第一課「神武天皇」(図15)、同年の『新編修身教典 尋常小学校用』巻二第三課(図16)、『尋常国語読本』巻四第十六課「紀元節」(図17)等、また明治44(1911)年刊行の児童読物『少年日本歴史読本』第四編「橿原の宮」(参考図7)など枚挙に暇はなく、画家の想像力が掻き立てられるのか、構図にも独創が見られる。

次に図6, 7, 8であるが、修身教科書においては、「大日本帝国」あるいは「我が国」の章で、神武天皇の即位の儀式が描かれる。いずれも山中の丘に白木の祭壇をしつらえて様々なものを供え、両側に幡を掲げ、御神体である鏡に礼拝する神武天皇の姿が表わされている。図6には尾竹国観²⁹⁾の落款が見える。この図様が教科書で最も早く登場するのは、明治14(1881)年刊行の『幼学綱要』(図18)である³⁰⁾。巻一の「孝行第一」にはほぼ同様の図が掲載され、「神武天皇鳥見山に皇祖天神を祭り玉ふ」と詞書がある。「敬忠謹写」と落款があり、松本楓湖の筆と認められる。国観は日本美術院の大先輩にあたる楓湖の構図を忠実に臨写したと考えられる。

この図様もまた明治20年代から30年代にかけて検定教科書で定型化された。明治20(1887)年の『尋常小学読本』巻之四第二十九課「神武天皇」(図19)、翌21(1888)年『小学校用日本歴史』巻之上「神武天皇ノ創業」(図20)、明治25(1893)年『小学修身書』巻之三第五課「神武天皇」(図



図17 尋常国語読本 巻四第十六課 紀元節 明治33年

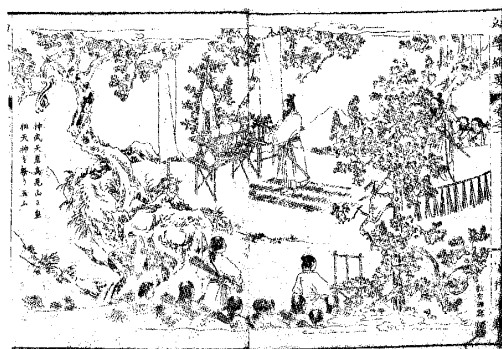


図18 幼学綱要 卷之一 孝行第一 明治14年



参考図7 少年日本歴史読本 第四編 橿原の宮 尾竹国観画 明治44年



図19 尋常小学読本 巻之四第二十九課 神武天皇 明治20年

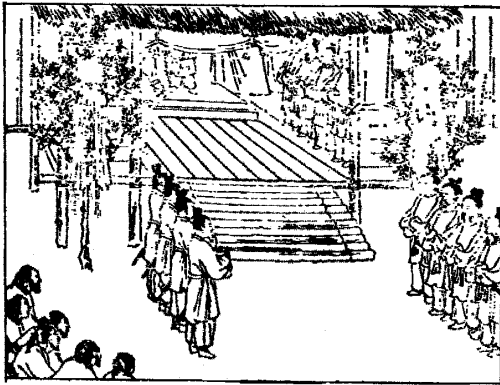


図20 小学校用日本歴史 巻之上 神武天皇ノ創業 明治21年



図21 小学修身書 卷之三 第五課 神武天皇 明治25年

21) 等が挙げられるが、『幼学綱要』の構図を踏襲したものが大半を占める。

以上のように、検定期教科書においては、歴史、国語、修身の間に、特段図様の偏りは無かったものが、国定期に至ると、歴史教科書では「八咫鳥」の故事の場面のみが繰り返して掲載され、「金鶏」の故事は描かれなくなる。その理由は明らかでないが、とくに歴史教科においては、フィクションの傾向が色濃い、金鶏の強烈過ぎるイメージが避けられた結果かもしれない。なお、修身教科書では挿絵の主題は神武天皇の創業（即位の儀式）に限定され、国語教科書では専ら金鶏の図様が引き継がれる等、科目毎の区分けが明確になされていることは興味深い。

このように三種類の図様に収斂された神武天皇の図像は、江戸期には全く作例のなかったものが、国芳・芳年・久一らの想像力と国家の要請によって、具体的なイメージが創出され、浮世絵や絵入読物等に描かれて一般化するとともに、各科の教科書に取り入れられて定型化し、日本国民に共有の神武天皇像が形成されたということになる。

(紙幅が尽きた。これ以降、3-2 八幡太郎-英雄像の変貌、3-3 楠公-新たな価値観の付加、と考察を続ける予定であるが、次号に譲ることとする。)

註

1) 藤岡繼平『挿画を中心とせる国史教育:尋常小学国史挿画の解説と其の精神』目黒書店 1938

2) 現代の国語教科書の挿絵に関してはいくつかの優れた研究がある。

高野裕之「小学校国語教科書における挿絵の役割について」(茨城大学大学院教育学研究科修士論文) 1994, 近藤均「文学教材の挿し絵が読みに与える影響」(上越教育大学大学院修士論文) 1998, 平野和子「小学校国語教科書の挿絵の研究」『横浜国大國語教育研究4』等。

3) 海後宗臣・仲新編『近代日本教科書総説 解説編』(講談社, 1969), 仲新『近代教科書の成立』(教育名著叢書1 日本図書センター, 1981), 平田宗史『教科書でつづる近代日本教育制度史』(北大路書房, 1991)等を参照した。

4) 明治5(1872)年8月に公布された学制は109章からなり、その内容は『大中小学区ノ事』、『学校ノ事』、『教員ノ事』、『生徒及試業ノ事』、『海外留学生規則ノ事』、『学費ノ事』の6項目によって構成されている。その後条文の追加があり、学制の全文は200章を越えている。

5) 中村紀久二によると、大多数は寺子屋の再編であり、実質的就学率は3割程度であったという。中村紀久二『教科書の社会史-明治維新から敗戦まで-』(岩波書店, 1992) p.35

6) 明治12年8月、「教育令」公布に先立ち、侍講元田永孚が起草し、天皇の名によって『聖旨』として文部卿などの政府首脳に内示された。

7) 中村紀久二『検定済教科用図書表解題』(芳文閣, 1986)による。

8) 『明治以降教育制度発達史』(教育資料調査会, 1965)

9) 松本楓湖(まつもと・ふうこ)天保11(1840)~

- 大正12 (1923)。茨城県稲敷郡生れ。本名敬忠。はじめ江戸琳派の沖一峨の門に入り洋峨と号し、のち文晁派の佐竹永海に師事し、号を永峨と改めた。菊池容斎の『前賢故実』に影響され、楓湖と号し歴史人物画を得意とした。明治14年『幼学綱要』や『婦女鑑』に挿絵を描き、明治期の挿絵界に影響を与えた。東洋絵画共進会、内国勲業博覧会審査員。31年日本美術院創設に参加。文展審査員。帝国美術院会員。安雅堂画塾を開設して今村紫紅、小茂田青樹、速水御舟等の逸材を輩出。代表作「蒙古襲来碧蹄館」「名和長年奉帝図」など。
- 10) 飛田周山 (ひだ・しゅうざん) 明治10 (1877) ~ 昭和20 (1945)。茨城県多賀郡生れ。本名正雄。明治26年に上京、叔父の彫金家海野美盛の書生となり、美盛のすすめで久保田米僊に入門、のち京都に移り竹内栖鳳に師事する。33年日本美術院研究所に入所、橋本雅邦に師事。36年5月、岡倉天心を五浦に誘い、日本美術院の五浦移転の契機を作った逸話がある。39年文部省教科書編纂係嘱託として国定教科書の挿絵を制作、昭和16年まで長期間従事。明治40年第1回文展に「維摩」入選。第九回文展に「星合いの空」「わたつみの宮」を出品。敬神の画家と呼ばれ、第十一回文展で「幽居の秋」、大正8年の第一回帝展で「神泉」特選。のち帝展審査員委嘱。
- 11) ほかに森田曠平、松川半山、鱈崎英朋、石井柏亭、梶田半古、河鍋暁斎、尾竹国観、浮世絵師の富岡永洗らの名が認められる。
- 12) 山本芳翠 (やまもと・ほうすい) 嘉永3 (1850) ~ 明治39 (1906)。美濃国明智 (現岐阜県明智町) 生まれ。本名為之助。京都にて南画を学んだ後、横浜で五姓田芳柳に入門、芳翠と号し洋画を学ぶ。明治9 (1876) 年工部美術学校創立と同時に入学するが翌年退学。11年、パリ万国博覧会に際し渡仏、新古典主義の画風を学ぶ。20年帰国、合田清と生巧館画塾を開設して後進の指導にあたる。22年、明治美術会結成に参加。「十二支」「浦島」などの話題作を発表。29年黒田清輝の白馬会結成に会員として参加。フランスで習熟した画技を黒田に先立って日本に伝え、多くの洋画家を育てた功績は大きい。
- 13) 合田清 (ごうだ・きよし) 文久2 (1862) ~ 昭和13 (1938)。江戸生まれ。明治13 (1880) 年、農学研究を志して渡仏したが、同宿の山本芳翠の勧めでパリの工房で木口彫 (西洋木口木版) を学ぶ。20年帰国。芳翠と「生巧館」を創設して木口木版技術者を養成しつつ、教科書や新聞の挿絵の版下製作に従事。教科書の挿絵に採用された合田の原画は「仏国風の彫刻に成れる挿画を用い、高尚で実に他にその類を見ない細美の彫刻である」と賞賛された。29年黒田清輝の白馬会結成に参加、以後30年間、東京美術学校西洋画科でフランス語を講じた。
- 14) 拙著「明治期における印刷技術の変遷と絵本」『はじめて学ぶ日本の絵本史 I』第五章 (鳥越信編 ミネルヴァ書房 2001) 参照。
- 15) 小島憲之ほか校注・訳『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2, 小学館, 1994)
- 16) 藤岡繼平『挿画を中心とせる国史教育』(目黒書店, 1938) p10
- 17) 近代における神武天皇像に関しては、千葉慶「近代神武天皇像の形成~明治天皇=神武天皇のシンボリズム」(『近代画説11』2002年12月) に精緻な考察がなされている。
- 18) 平野重政著、安政3 (1856) ~ 5 (1858) 年刊。古谷知新編輯『日本歴史図会』第二輯 (国民図書1920) に全頁復刻される。この図のほか、神武天皇の故事は「八咫烏軍士を導て山路を踰る処」の図、および「神武天皇嗚間乃丘に登て国形を眺望たまふ処」の2図が掲載される。
- 19) 「我邦の学に深く意を注ぎて、太古の衣服器械などをまでも、其名に由てその実を閲め、検証して画出されたることの、採用ふべきことどもは、それに抛たることもまた多く、又画工国芳の創意より出たることも多むど…尽く太古の眞形なりと思ふことなかれ…」(一夢道人『日本国開闢由来記』凡例 安政3 (1856) 年2月)
- 20) 菊池容斎『前賢故実』安政4 (1857) 跋、明治元 (1868) 刊、木版袋綴 全10巻。神話や伝説の人物、歴史上の武将たちを上古から南北朝に至るまで総計571人収録した列伝で、一見開きに一人ずつ図像が描かれ、略伝が添えられる。容斎は記紀をはじめ古書や絵巻の類を渉猟し、社寺を訪ね、実証精神を持って想像力に裏づけを与えてこれらの肖像を描いたと伝えられている。天保年間から描き継がれ、1868 (明治元) 年に全10巻の版本が刊行された。容斎はこれを明治天皇に献上し、後に「日本画士」の称号を

与えられている。

- 21) 中村紀久二『教科書の社会史—明治維新から敗戦まで—』(岩波新書233, 1992)
- 22) 「●神武天皇の御像」『日本』第406号 雑報 (明治23年6月14日) この号には、小川一眞撮影による、この像のコロタイプ写真が附録され、大評判を呼んだという。
「○博覧会の贅評 ●神武天皇御肖像」『日本』第367号 雑報 (明治23年4月14日)
- 23) 竹内久一談「皇祖御立像製作の感想」『日本及日本人』530号 (明治43年4月1日 政教社)
吉田千鶴子「竹内久一レポート～岡倉天心の彫刻振興策と久一」『東京藝術大学美術学部紀要16』1981
- 24) 中村紀久二『複製国定歴史教科書 解説』(大空社, 1987) p22-23
- 25) 註15前掲書
- 26) 大蘇芳年筆『大日本名将鑑』明治11 (1878) ～15 (1882) 年出版 大判錦絵 51枚揃
- 27) 明治5 (1872) 年、神武天皇即位の日として2月11日が紀元節に設定された。
- 28) 国立国会図書館には、明治15年9月から19年4月の間に刊行された、異版の『大日本名将鑑』(27×12cm 和装銅版画本) が5種類所蔵されている。
- 29) 尾竹国観 (おだけ・こっかん) 明治13 (1880) - 昭和20 (1945) 新潟県生まれ。本名亀吉。高橋太華、小堀鞆音に師事して歴史画を学び、15歳の時富山博覧会に出品し、褒状を受賞。1909年第3回文展で「油断」二等賞、11年5回文展「人真似」、15年9回文展「血路」が三等賞を受賞するなど、文展を舞台に活躍した。兄の尾竹越堂、尾竹竹坡と八華会を結成。歴史的題材に取材した作品を得意とし、屏風仕立ての大作も多いが、児童書や教科書の挿絵にも精力的に取り組んだ。
- 30) 『教学聖旨』の執筆者元田永孚が、明治天皇の内意に沿って仁義忠孝を説いた教訓書で、宮内庁より出版された。

【参考文献】

- 小中村義象・落合直文『家庭教育 歴史讀本』全12冊
博文館 1891～1892
- 大和田建樹『日本歴史譚』全24編 博文館 1896～1899
- 萩野由之『少年日本歴史讀本』全18冊 博文館 1911

- 喜田貞吉『国史之教育』三省堂書店 1910
- 藤岡繼平『挿画を中心とする国史教育：尋常小学国史挿画の解説と其の精神』目黒書店 1938
- 唐澤富太郎『教科書の歴史：教科書と日本人の形成』創文社 1968
- 松島栄一『岩波講座 日本歴史 別巻1』岩波書店 1963
- 海後宗臣編『日本教科書大系近代編』第1～27巻、講談社 1961～1967
- 海後宗臣・仲新編『近代日本教科書総説 (解説編)』講談社 1969
- 植村清二『日本歴史叢書 神武天皇』至文堂 1966
- 山形 寛『日本美術教育史』黎明書房 1967
- 鳥居美和子編『明治以降教科書総合目録』(教育文献総合目録 第3集 国立教育研究所編) 小宮山書店 1967.3-1985.2
- 『日本近代教育百年史』国立教育研究所 1974
- 江馬 務『江馬務著作集12 風俗語集積』中央公論社 1977
- 安丸良夫『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈—』岩波新書103 1979
- 東京書籍株式会社社史編集委員会編『近代教科書の変遷：東京書籍七十年史』東京書籍 1980
- 『明治文化史 第三巻 教育・道徳編』原書房 1981
- 仲 新『近代教科書の成立』(教育名著叢書1) 日本図書センター 1981
- 瀬田貞二『落穂ひろい—日本の子どもの文化をめぐる人びと 上・下』福音館書店 1982
- 榎崎宗重ほか編集『原色浮世絵大百科事典』1～11 大修館書店 1982
- 『近代日本教科書教授法資料集成』第7巻 教師用歴史地理編 東京書籍 1983
- 中村紀久二監修『複製文部省著作国語教科書』大空社 1984
- 中野三敏・肥田皓三編『近世子どもの絵本集 上方編・江戸編』岩波書店 1985
- 飛鳥井雅道『文明開化』岩波新書320 1985
- 奥田真丈監修『教科教育百年史』〔正編〕〔資料編〕建帛社 1985
- 中村紀久二『検定済教科用図書表 解題』1986 芳文閣
- 山住正己『日本教育小史—近・現代—』岩波新書363

明治大正期の小学校教科書における挿絵の考察

- 1987
中村紀久二監修『複製国定歴史教科書』大空社 1987
中村紀久二『複製国定歴史教科書解説』大空社 1987
小池正胤・叢の会編『江戸の絵本－初期草双紙集成－』
I～IV 国書刊行会 1987～1989
遠山茂樹校注『天皇と華族』日本近代思想体系2 岩
波書店 1988
恵俊彦監修『国芳の絵本①②』岩崎美術社 1989
中村紀久二監修『複製国定修身教科書』大空社 1990
平田宗史『教科書でつづる近代日本教育制度史』北大
路書房 1991
中村紀久二『教科書の社会史－明治維新から敗戦まで－』
岩波書店 1992
アカデミー編『日本の教育と教科書のあゆみ』文教政
策研究会 1993
- 海後宗臣監修『図説教科書の歴史』日本図書センター
1996
海後宗臣・仲新・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本
の教育』東京書籍 1999
安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店 1992
嵯峨敏全『皇国史観と国定教科書』かもがわ出版
1993
西川長夫・松宮秀治『幕末・明治期の国民国家形成と
文化変容』新曜社 1995
酒井忠康・橋秀文『描かれたものがたり－美術と文学
の共演』岩波書店 1997
村重 寧『天皇と公家の肖像』（日本の美術No.387）至
文堂 1998
鳥越 信編『はじめて学ぶ日本の絵本史 I』ミネルヴァ
書房 2001